

校長室だより～和光高校今昔 第40号 H27. 2. 6

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

サッカー部の挑挑

正月の風物詩、今年の高校サッカーは国立競技場から埼玉スタジアム2002に決勝の舞台を遷し、石川県星稜高校の初優勝で幕を閉じた。その中で何とも残念なのが近年の埼玉県勢の不振である。今から31年前の昭和58年の埼玉予選は和光サッカー部が最も全国に近づいた大会だったかもしれない。

10期田代誠を主将とするこのチームは智将・濱名哲也が手塩にかけて育てた代である。なにしろ大きくて強い選手が揃っていた。GKは富岡と米山の2枚看板、富岡はワールドクラスの大型キーパー、前年のチームでも活躍し経験も豊富である。チームの特徴は守備、CB田代を中心に小南・大平・若井らが並ぶ。田代のヘディングの強さはマリノス中沢を上回っただろう。その成果は現在に現れる。この中ではやや小柄な若井はスタミナ自慢。インテル長友ばりにサイドを支配する。小南は早いし絶対に当たり負けしない。田代とのコンビはまさに鉄壁の守りだ。大平の武器はスピード、サイドバックの攻撃参加がほとんどない時代に若井と交互に両サイドを攻め上がる。今年のワールドカップのザックジャパンの長友・内田コンビを想像してもらいたい。中盤は底から真田・森田・岡竹・添田らのテクニシャンが揃い、自慢の2トップはスピードと高さを備えた金田と岡崎。まさにドリームチームだった。



この代、最初の試合となる新人大会では残念ながら西部地区敗退。といっても私立越生にわずかの差で決勝で敗れての2位、当時は前大会である選手権予選のシードチームに加え地区代表は1校だけだった。リベンジに燃える傷心の冬はもちろんBコースで力を蓄える。そして満を持して臨んだ関東予選だったが伝統校児玉に敗れ、インターハイ予選の出場権も失う。そして迎える最後の選手権予選。マネージャー兼任の小薬の引くクジはいつものように強豪校。2回戦でその年のインターハイ県代表の埼玉栄のブロックに入る。この正念場を前述のDF陣が身体を張って守り抜きPK戦に突入。雨に強いGK米山からPK用に終盤起用された富岡が好セーブを連発。見事強敵を打ち破ったのだ。現在家業の中

華料理店を継ぎ店主となっている富岡俊夫はこの試合を次のように振り返る。「速くて強い相手の攻めをディフェンダーと米山が必死に守ってのPK戦でした。PK戦では絶対に止めようという気持ちよりも本当に自然に相手シュートの軌道に体が吸い込まれるようでした。」余談だが富岡の息子たち3人は野球で大活躍、次男は今夏あと一步で甲子園の道を絶たれた市立川越の4番バッターである。

第2シードを破っての3回戦進出。決勝までの道が開けたと思われたが、雨中の延長PK戦の疲労は思ったより激しく、結局次戦の市立川口に敗れてしまった。その余勢かこの大会の決勝戦敗者は市立川口。負け惜しみになるが遜色ない力を持っていたと信じたい。敗因かはわからないが、この1期下の11期生は部員3人、12期生も一桁とそれまで各代20人近い部員を誇るサッカー部の隆盛が途切れ、セカンドチームとの力の差が開いたことも一因か。もう一つはサッカー部10期生は優等生揃い、成績優良だけでなく皆勤や品行方正の生徒達が居並ぶ。今井や豊島などのワイルドな9期生の要素が少しでもあれば違った結果になったかもしれない。田代・岡竹・米山が当時人気のしぶがき隊を文化祭や三送会で演じ人気を博したのも忘れられない思い出である。

